一 色 青 海 遺 跡

調査の経過　一色青海遺跡は、中島郡平和町須ヶ谷及び稲沢市儀長町地内に所在する。本遺跡は、一宮市街地から稲沢を経て平和町に至る三宅川により形成された標高１ｍ前後の自然堤防とその後背湿地上の荒蕪地に位置している。

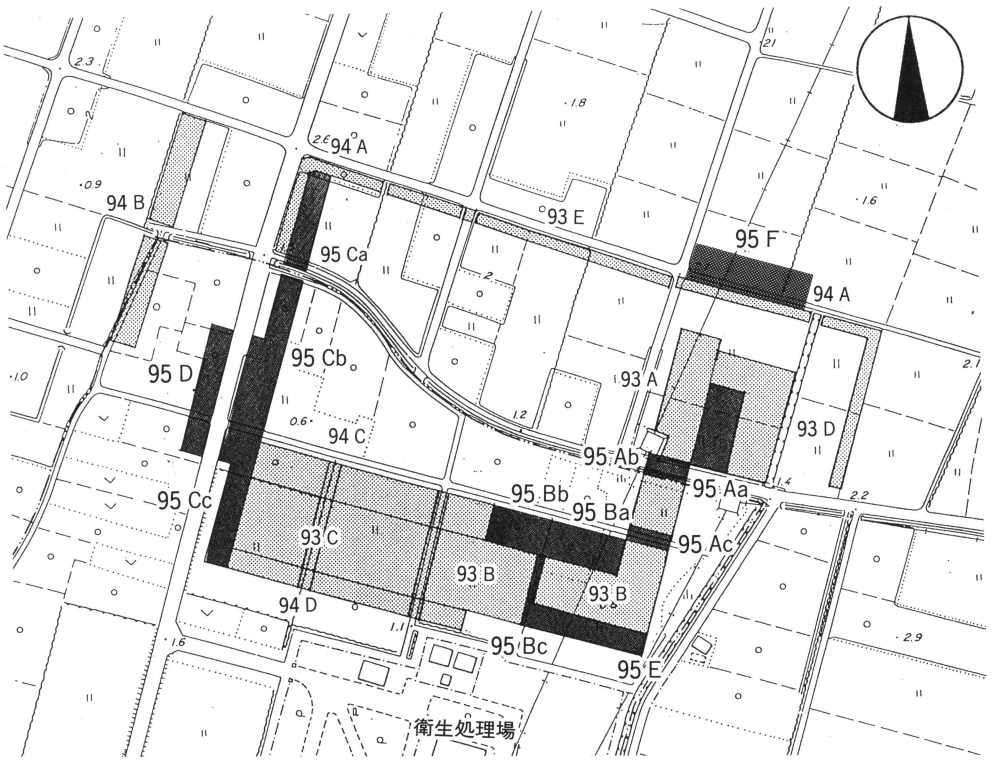
周辺には、南東約1500ｍに尾張国分寺跡や堀之内花ノ木遺跡、大縄遺跡などがあり、７世紀から８世紀にかけて、この地域が尾張の中心的存在であったことをうかがわせる。

今回の調査は、日光川上流流域下水道浄化センター建設及び県道馬飼井堀線建設に伴う事前調査として、愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じて委託を受け、5800㎡を平成７年４月から平成８年３月にかけて実施した。日光川上流流域下水道浄化センター建設に伴う調査区域については、面積も大きく区域も分かれているので、各区域ごとにＡ区・Ｂ区・Ｃ区・Ｄ区・Ｅ区と分け、ＡＢＣ区についてはさらにそれぞれの区を、ａｂｃの３区画に細分して調査を実施した。

調査の概要　検出できた遺構は、弥生時代中期後葉と鎌倉・室町時代の２期に大きく分かれる。

弥生時代中期後葉の遺構には、竪穴住居や掘立柱建物、方形周溝墓などがある。とくに竪穴住居は60棟以上が検出され、居住域のまとまりを見ることができる。また、方形周溝墓はＡ・Ｂ区に集中しており、墓域が遺跡東部にあることを再確認した。

鎌倉・室町時代の遺稿は、方形土坑がほとんどであり、その数は20基以上で主軸方向の類似性を認めることができた。　（水谷寛明）



第１図　調査区位置図（１／3500）

95A区・B区

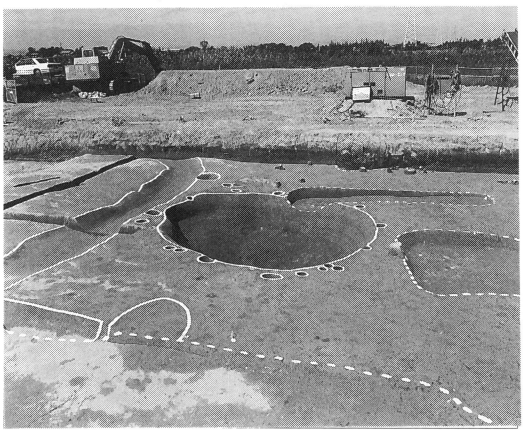
A区は93A区・93D区に隣接する調査区であり、調査の都合上、3調査区に区分した。Aa区では弥生時代中期後葉の竪穴住居11棟、方形周溝墓3基、井戸1基、溝及び鎌倉・室町時代の方形土坑8基などが検出された。Ab区ではAa区で検出された方形周溝墓SZ03の南半部と鎌倉・室町時代の方形土坑2基、Ac区でも93B区で検出された方形周溝墓SZ04の北半部が各々確認された。

A区の方形周溝墓は竪穴住居を切る形で検出されており、この地点では当初居住域であったのが墓域に転換していることが追認された。井戸SE01は直径約4mの円形プランを持ち、漏斗状に掘り込まれており、井戸側構造は全く残存しなかった。このSE01の周囲にはピットが多数存在しており、覆屋などの井戸に関連する施設になると思われる。

B区は93B区に北接する調査区で、3調査区に区分した。Ba区は調査前の現況が畑地であったため、周囲の調査区に比べ弥生時代中期後葉の遺構が良好な状態で残存していた。ここでは弥生時代中期後葉の竪穴住居15棟、方形周溝墓2基及び鎌倉・室町時代の方形土坑2基などが検出された。一方、Bb・Bc区は調査前には水田または用水路であったため遺構の残存状況は不良であった。Bb区では時期、性格とも不明の溝群、Bc区では鎌倉・室町時代の方形土坑1基などが確認された程度である。

Ba区の中で特筆すべき遺構は、拡張して作り直した方形周溝墓SZ01である。SZ01は当初周溝の南東部が切れるタイプの一辺約10mの方形周溝墓であったが、後に東辺を埋めてコの字状の溝を掘削し直して、その結果周溝の南東部と北東部が切れる長方形の周溝墓に変更されている。溝内部からは供献土器と考えられる壺類などが数点出土した。

一色青梅遺跡の方形周溝墓は、その形態と主軸方位から2種に区分できる。一つは幅約2mの溝を巡らせたもので、N－60°－Wの方位を基準に設定されている（例としてAa区SZ06・Ba区SZ01がある）。もう一つは幅1m前後の溝を巡らせたもので、ほぼ南北方位を基準に設定されている（例としてAa区SZ05・Ba区SZ02がある）。Ba区の検出状況からみて、後者のタイプの方が古いと考えられる。（鈴木正貴）



95Aa区SE01

95Ba区SZ01

第２図　95 A 区・B 区遺構図（Ｉ：400）

95Ｃ区・Ｄ区

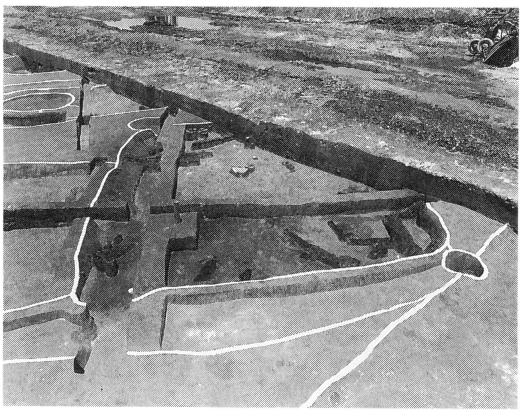
Ｃ区は、94Ａｅ区の南、93Ｃ区・94Ｃ区・94Ｄ区の西に隣接する南北に長い調査区で、北から95Ｃａ区、95Ｃｂ区、95Ｃｃ区（以下Ｃａ区、Ｃｂ区、Ｃｃ区）の３つに分けて調査した。北側のＣａ区、Ｃｂ区において弥生時代中期後葉の竪穴住居31棟、掘立柱建物３棟、土坑多数、溝３条、自然流路１条と中世の方形土坑４基を、南側のＣｃ区で弥生時代中期後葉の土坑２基と中世の方形土坑４基を検出した。Ｃｂ区南側からＣｃ区北側の部分は近年の天地返しで既に遺構面が破壊されていた。

弥生時代中期後葉の遺構は、Ｃａ区北端で自然流路ＮＲ01が東西方向に流れ、その南からＣｂ区北側にかけて竪穴住居、掘立柱建物、土坑からなる居住域が広がり、Ｃｂ区中央部分において溝を４条確認した。Ｃａ区南側からＣｂ区北側の竪穴住居・土坑の希薄な微高地中央部分において掘立柱建物が３棟検出され、土坑がその南側部分に広がる。

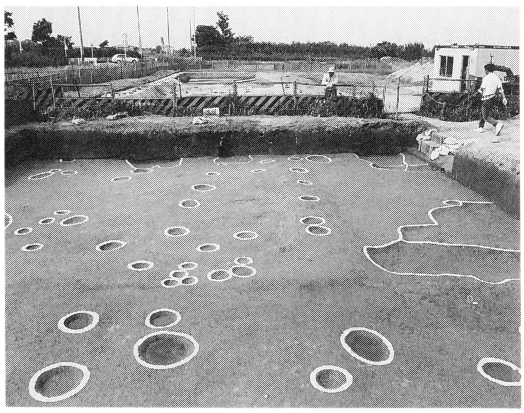
竪穴住居には、住居床面近くで焼土・加熱を受けた土器とともに炭化材が放射状に検出される焼失したと思われる住居（Ｃａ区ＳＢ01、ＳＢ03、ＳＢ05）や自然流路の溢れた水とともに流れた砂によって覆われた住居もあった。住居の掘り方平面は隅丸方形と隅丸長方形があり、壁際に幅15～30cmの溝を巡らすものが多い。屋根を支持したと思われる主柱穴は不明瞭で４本の柱が揃うものはなかった。床面の焼けた跡である地床炉がみつかり、炉の焼土面に甕形土器の底部が逆さの状態で据えられたもの（Ｃａ区ＳＢ03）や、加熱赤変した炉石が偏平な面を上にして置かれたもの（Ｃａ区ＳＢ01）もあった。掘立柱建物は桁行２間×梁行１間のものと桁行３間×梁行２間のものがあり、柱穴配置から全て高床倉庫と考えられる。土坑の埋土は焼土と炭層の互層になるものと炭粒を含む程度のものとがあり、前者からは魚骨や炭化木などの有機物が出土している。Ｃｂ区中央部分の溝には２～３回の重複があり、何のための溝か不明である。自然流路ＮＲ01では居住域に接する南肩部分で多くの土器が出土する炭層が数層あり、南側の集落に伴うことが推定できる。またＮＲ01内に時期は不明であるが地震による噴砂痕が確認された。

Ｃｃ区では中世の大小様々な方形土坑が散在して見つかっており、ＳＫ03からは山茶碗・匙状の木製品が出土しており、13世紀末～14世紀前半にかけてのものと思われる。

Ｄ区は95Ｃ区の西に隣接する調査区で、弥生時代中期後葉の溝９条と中世の方形土坑１基を検出した。弥生時代中期後葉の溝は格子状に交差し、旧地形の傾斜に沿って流れてい



95Ｃａ区　ＳＢ03



95Ｃｂ区　掘立柱建物

第3図　95C区・D区遺構図（1：400）

る。Ｃｂ区中央部分にあった溝と同様な形態をもつものである。溝には層位・切り合いからＳＤ01・ＳＤ02からＳＤ03・ＳＤ04への主に２段階の変遷がある。

まとめ　今回の調査をこれまでの調査成果をふまえてまとめると以下の６点である。

1．弥生時代中期後葉の95Ｃａ区の自然流路ＮＲ01は北東から南東に蛇行しながら流れるものと想定され、95Ｃａ区では順次南側から埋まっていったものと思われる。

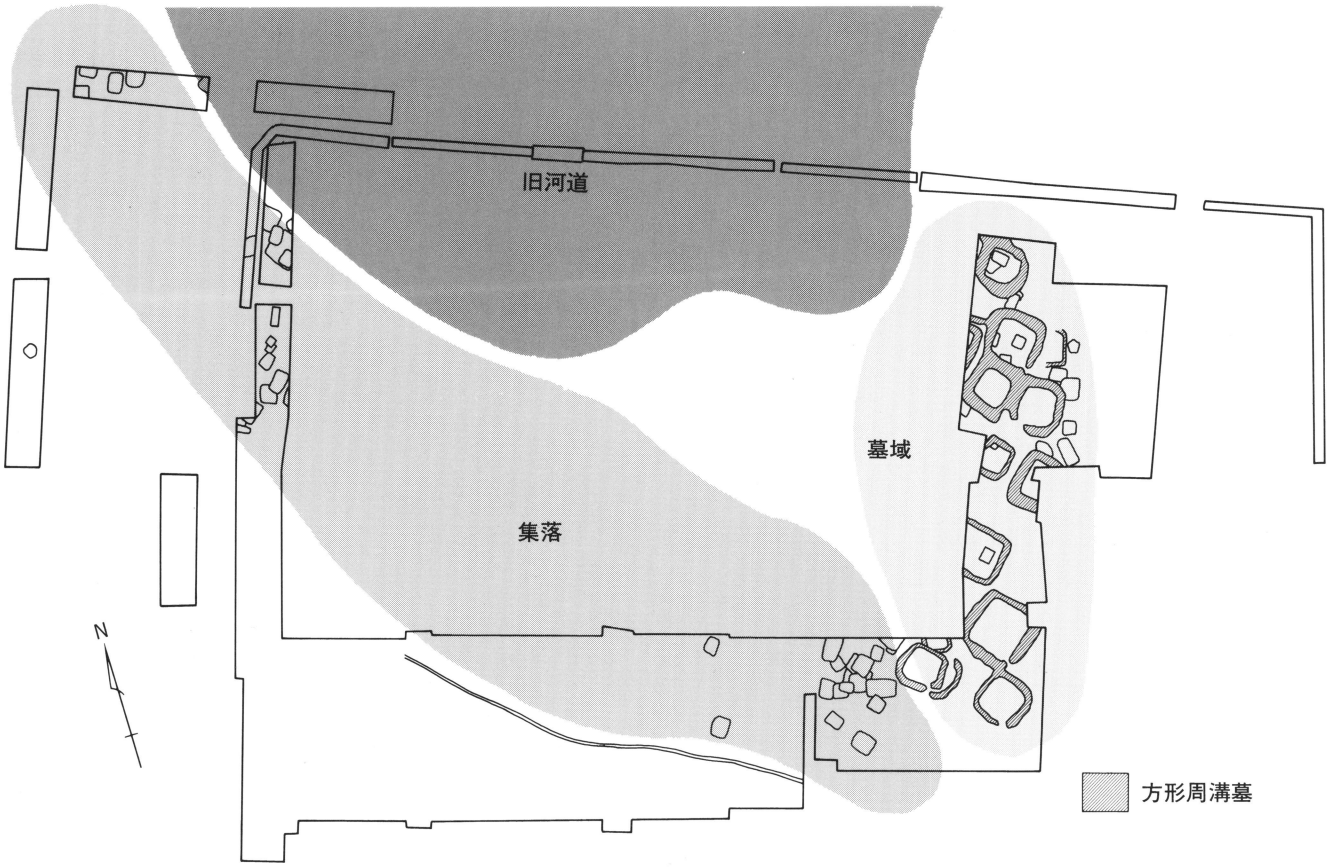
2．弥生時代中期後葉の居住域は北西に隣接する一色長畑遺跡から南東の95Ｂ区の方向に細長くのびる状況が想定できるようになり、その中で掘立柱建物周辺では95Ｃｂ区北側のように他の遺構が希薄な部分があり、農作業に伴う作業場などの空間になる可能性がある。

3．弥生時代中期後葉の墓域は93Ａ区・95Ａａ区から93Ｂ区・95Ｂｂ区の南北に広がり、溝の方位・切り合いから２段階の変遷がある。

4．95Ｄｂ区・95Ｃｂ区南側部分では小規模な溝が格子状にめぐり、他の遺構が見られないことから、居住とは直接関係のない空間として利用されたものと考えられる。

5．95Ｃｃ区南側において、弥生時代中期の遺構・遺物が確認されたものの希薄になることから、弥生集落の南西端になるものと思われる。

6．中世の方形土坑は昨年度までの調査によりわかっていた土坑の分布傾向に加えて、低い部分に占地をしている様子が伺われた。また方形土坑の分布は従来の調査区南側にさらに広がりをもつようである。　（蔭山誠一）



第４図　一色青海遺跡復元想定図（弥生時代中期）